日本の「文学」概念、ふたたび――古典ジャンルと文体様式を問いなおす

鈴木貞美

一、「文学」概念の転換――漢詩文から人文学へ

日本前近代において和歌も物語も「文学」と呼ばれたことは一度もない。「文学」は、もと『論語』〔先進〕に、弁舌に優れることに対していわれる文章博学の意味を承けて用いられた。六朝時代に文章の価値が高まると、「文」と「学」は対義語になり、また併せて「武学」の対義語にもなったが、そののちは、「文章の学」の意味で用いられてきた。

日本では、上代に『懐風藻』〔序文〕（漢文）に漢詩文の学を意味する語として登場し、一三世紀前半、橘成季編の説話集『古今著聞集』の部立「文学」は、「詩歌」と併称してきた、漢詩を和歌と分立させていた。徳川幕府は朱子学を公式の学問としたが、五代将軍・綱吉は俳諧師・北村季吟より古今伝授を受け、季吟父子を歌学方に据えた。のち一七九三（寛政五）年、塙保己一が設立した和学講習所では漢文と和文の書物を同列に扱ったが、「文学」概念は儒学に規定され、漢文（古典中国語）に限っていた[1]。それを確認できる書物がある。

一八七八（明治一一）年、世界の学術教育制度に関心を注ぐお雇いアメリカ人、ダビッド・モルレーの勧めに応えて文部省が編んだ『文藝類纂』が刊行された。一旦、大学として組織された文部省で、博覧強記で知られた学者官僚、榊原芳野の編になる。〔巻一～六〕の上下二巻ずつを「文字」「文章」「学問」に当て、〔巻一・二〕で仮字（仮名）と漢字、〔巻三・四〕で和文と漢文の歴史を述べ、そして〔巻五〕「学志上」中「文学」の項は「文学総論」ののち「儒学総論」「科試及第」「大学沿革」と儒学系を並べ、「書学」「画学」も加える。〔巻六〕「学志下」で「医学」「薬物学」「暦学」「漏刻学」「天文学」を扱い、〔巻七〕を「紙」、〔巻八〕を「文具」とし、アルファベット圏とは異なる日本の学術史を総覧する。

『文藝類纂』に漢文の〔序文〕を寄せている文部省大書記、西村茂樹は、この書物の完成を見て一八七九年に『古事類苑』の企画を建議したにちがいない。その「編纂事暦」に謳うように、西欧のエンサイクロペディア（百科事典）に相当する内容を新しい類書（項目別に分類した書物）として計画、榊原芳野は当初より国学者、小中村清矩（さよのり）・中国史学者、那珂通世（みちよ）らとかかわった。その計画時から「文学」部は『文藝類纂』〔巻五〕に経学、史学、法学、心学、小説の項などを加え、別に「歌舞遊」部を立て演芸を大幅に補足した[2]。

「日本文学」の語が、初めて公に用いられたのは、福地源一郎（桜痴）が一八七五（明治八）年四月二六日付け『東京日日新聞』社説に掲載した「日本文学の不振を嘆ず」だった[3]。不振の理由は「日本語で歴史が書かれたことがない」ことだった。「日本文学」を日本語

の著作に限定し、その範囲には歴史も入れ、江戸時代の式亭三馬らの戯作も数えている。西欧一九世紀にはナショナリズムの勃興とともに自国語(national language)の文学史が重んじられ、イギリスではチャールズ・ディケンズが国民作家の地位を得ていた。福地は、もと旗本で幕末に幕府使節としてイギリス・フランスに赴き、西欧語の概念に通じていた。

英語の翻訳語の多くは、一九世紀後半、中国南岸で宣教師によって編まれた英華・華英辞書を通して受容され、定着した。とりわけドイツ人宣教師ウィリアム・ロブシャイド編『*English and Chinize Dictionary*』(Hongkong, 1866-69)と、その逐語訳に自然科学用語を増補した『井上哲次郎訂増　英華辞典』(一八八三)の影響が大きい[4]。それらによってジェームス・ヘボン編の英和・和英辞書にも漢語の数が圧倒的に増えた。

明治初期から英語の翻訳書にベストセラーズが出ている。英文の翻訳自体は漢文と同じく構文が「S・V・O」型で日本の知識人にとってむつかしいことではない。中国語にはテンス(時制)がない、関係代名詞もないなどと英語とのちがいがいわれるが、それなりに解決する術はあった。問題は朱子学と近代英語の概念編制のちがいだった。中国で「文学」は知識人の文言による学を意味した。近代英語では自国語の著作一般を意味する"literature"のうち、"polite literature"(高級な文学)すなわち"Belles-Lettre"(フランス語からの借用語)に相当する。その範囲は"the humanities"にあたる(『OED』参照)。それを中国語で「人文学」と訳したのは『周易(易経)』〔繫辞上伝〕に見える「天文・地文・人文」を借りたからである。この範疇が今日の日本人にはピンとこないようだ。

新概念「文学」は、国家制度では一八七七年設立の東京大学の文学部に現れる。一八七一年の学制では西欧の伝統的総合大学(university)の神学部にあたる「教科」(皇学と漢学)が計画されていたが、文部省内で洋学派が台頭し、「教科」は消え、「法学」「医学」に自然科学(natural sciences)に相当する「理学」、人文学に相当する「文学」からなる四学部編成となった。文学部第一科では西欧の哲学・史学・政治学を教え、第二科が和漢文学科だった(帝国大学設立の直前に政治学及び理財科を法学部に移管)。

一八八五年に内閣総理大臣に就いた伊藤博文は翌年から東京大学を改組し、法・文・理・医に工、農の分科大学をもつ国際的に珍しい実業寄りの帝国大学に再編してゆく[5]。その頃、エリートの卵と位置づけられた中学生が西洋一辺倒から日本に関心を移しはじめた。一八九〇年、博文館は『日本文学全書』全四〇巻、『日本歌学全書』全二〇巻(続二〇巻)を刊行開始。一八九二年から中国古典の講義を『支那文学全書』全二四巻を刊行開始する。

その年一二月、日本で最初の「日本文学史」を標榜する三上参次・高津鍬三郎合著「日

本文学史」上下巻(金港堂)が刊行された。三上参次は前年、帝大和文科を卒業し、史料編纂所に勤務。一歳上の高津はこの年、第一高等学校教授。高津は上巻〔総論〕で、西欧の各国文学史を強く意識し、範囲は人文諸学に跨り、漢文も入れるが、国語を重んじ、詩を本質とし、一般に知識の普及をはかる「純文学」を中心に置くという。〝pure literatur〟という語は、欧語にはまず見ない。フランスのイボリット・テーヌ『イギリス文学史』(*Histoire de la littérature anglaise*, 4vol. 1863)をはじめ、真・善・美の調和をいう新カント派も学んでいた高津が工夫したものだろう[6]。イギリスが一九世紀後期に力を入れた国民一般の教養をあげる普通教育も参照していよう。

三上参次は下巻を担当、鎌倉時代の「和漢混和文」に着目し、江戸時代の漢学・国学の解説にも力を入れた。明治期普通文が混乱状態にあると見ていたからだ。国語の正格は帝国憲法に示される硬い漢語の多い漢文書き下し体だったが、ジャーナリズムの発達はその平易化と俗語の混入を進め、和文体(江戸時代に国学者が係り結びを復活させた擬古文)と欧文直訳体も入り交じっていた。その後、文部省の教育政策も変化する。日清戦争時(一八九四～九五年)には中学校の国語に漢文の時間を増やすが、暗唱と作文を必須教科から外した。この世代から漢詩文が書けなくなり、日露戦後には明治期の漢詩ブームは去ってゆく。市場の拡大を見据えた清朝口語は外国語学校や市立大、私学で教えられた。

一八九九年、帝国大学国文科助教授・芳賀矢一が実質的に文部省傘下にあった帝国教育会で講演した『国文学史十講』(冨山房)を刊行。これまでの日本文学史は学問を含んでいたが、自分は絵画のように美として鑑賞される和歌や物語の「美文」に限ると明言し、構想を述べた。これはドイツのロマン主義が育てた想像力と感情表現を重んじ、韻文の詩・戯曲中心の〝Schöne literatur〟(美文学)を参照したものだろう。〝Wichenchaft literatur〟(知文学・理文学)に対する概念で、文芸批評は知文学とする。彼はそこで「軍記物語」「歴史物語」も「美文学」に加えている。歴史叙述には知的解釈が伴い、絵画や音楽も作品を構成するには知が欠かせないことに思い至らなかったようだ[7]。

翌一九〇〇年、芳賀矢一は私塾で『国学概論』の講義を行い、荷田春満(あづままろ)・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤の「四大人(しうし)」について述べた。彼は大学では開明的な小中村清矩の教えを受けたが、神道家の父親が各県で要職を務めており、この系譜には幼少期から馴染んでいた。その講義で井原西鶴や近松門左衛門を「純文学」と呼び、のちも用いつづけた。

夏目漱石の最初の新聞小説『虞美人草』(一九〇七)〔十五〕節に東京帝国大学の「哲学と純文学は科がちがう」と出てくるが、文科大学に「純文学」という科はない。一九〇四

年の大改革で「哲・史・文」の三部に分け、「文」には国・英・独・仏の文学科が並ぶ。それは「人文学」を指す広義の「文学」に対して狭義をいう通称だった[8]。

一九〇五年、ドイツから帰った芳賀矢一は国学院で「国学とは何ぞや」を講演し、国学は日本の「文献学」(philology)だったと述べ、その国粋主義を立て直すともいう。東京帝大では『記』『紀』『日本霊異記』『今昔』などを扱い、「日本国民伝説史」を講義した。彼がドイツで学んだのは、ギリシャ・ローマ文化の基盤を重んじるウィリアム・フォン・フンボルト系の人文学で、歴史の総体に向かうものだった[9]。

この動きは東京帝大国文科助教授、藤岡作太郎が日露戦争後の文化状況に立って新たにまとめた『日本文学史講話』(開成館、一九〇八)に響いたと想われる。広く文化史を見渡し、日本文学史を一新する企図に立ち、上代における儒学と仏教の受容が知識層に洗練を及ぼしたと述べている。それに対して、『記』『紀』は古代の民衆から遊離した官僚の作文にすぎないと論じていた津田左右吉は、独自の平民主義の立場で『文学に現はれたる我が国民思想の研究』全四巻(洛陽堂、一九一七-二一)をまとめた。どちらも第二次大戦後もよく読まれたが、ともに、その後の『記』『紀』の評価史を振り返ろうとしない。それにしても日本で最初の書物として聖徳太子の『三教義疏』(六一一、六一五)を掲げる日本文学史年表を見たことがない。日本の近代国家が「廃仏毀釈」で、仏教を排撃しながら国家神道を組織した名残ではないか。

のち、芳賀矢一は『攷証今昔物語集』(一九一三、一四、二一)で、他の説話集から類話を集成した。その〔前篇〕の〔凡例〕では〔悉曇部〕の典拠を唐の仏教説話集『法苑殊林』に求め、『今昔』を「日本最古最貴の説話集」といい、『国文学史概論』(文会堂書店、一九一三)の「中古」の末尾では「世界の伝説研究者の至大の宝」と謳った(63頁)。国際的な神話・民話研究ブームを意識した言だが、彼は日本の人文学史に大きな窓を開いていた。その遺著(二分冊、冨山房、一九二九)には「日本文献学」「日本漢文学史」も並ぶ。ところが、国文学界では戦後まで、芳賀矢一の主情的な国語国文学史観が受け継がれていた[10]。

なお、文部省は一九〇三年、最初の国定教科書を編集した際、尋常小学校三年用の国語読本に言文一致体各種(敬体・常体)を導入した。少数の文芸家がきっかけをつくったものだが、教育界に学齢にふさわしい教育を、という声が高まった。日露戦争後には知識人も小説や随筆に口語体を用いたが、政治および学術論文は漢文書き下し体、書簡文は候文とジャンルとメディアにより文体様式は固定し、重化学工業化と商戦の展開、新中間層の形成など社会再編の動きのなかで挨拶文や報告文の書き方から問われ、作文熱が沸き興った。

第一次世界大戦後、一九二〇年に新聞は各社の申し合わせで政治記事も口語体にした。が、一九三一年、満洲事変の勃発とともに第一面に漢文書き下し体が復活、戦況が激しくなる度にジャーナリズムの紙誌面は「敵艦殲滅」などの漢語で埋め尽くされ真っ黒になった。国語の正格が口語体に改まるのは戦後、連合軍の占領下のことである[11]。

二、近現代における古典ジャンルの発明

明治期には改良長歌など新体詩運動を経て、一九一〇年を前後して口語自由詩が展開しはじめると、「詩歌」は近代詩・近代短歌・近代俳句を総称する語となった。それとは別に、古典ジャンルも新しく「発明」されてゆく。芳賀矢一は先にふれた「軍記物語」「歴史物語」のほか『国文学歴代選』（文会堂、一九〇八）には「歌物語」の名づけが見える。英文学者、土居光知の『文学序説』（岩波書店、一九二二）は叙事・抒情・劇詩を主要とする西欧的文学史観に立ちながらも「日記文学」「随筆文学」（『枕草子』『徒然草』）を名づけた[12]。

だが、「文学」のみならず、下位ジャンルの概念にもそれぞれ歴史がある。たとえば「説話」は、前近代中国語・日本語ともに一定の内容のある話という意味しかない。ときに倒語して「話説」とも。今日、仏教説話・世俗説話に二分しているが、『今昔物語集』〔本朝部〕の「仏法」「世俗」の二分法に従ったもので、宮廷を世俗と呼ぶのは「唯識」（認識論）により、衆生を仏法の側とそれ以外に分ける法相宗の考え（二諦論）による[13]。

「物語」の和語「もの」には「ものの化」のように漠然と一般化するはたらきがあり、個々の説話にも、連鎖状にストーリーを紡ぐものにも用いる。『竹取物語』『源氏物語』は後者。『伊勢物語』は、業平の和歌を焦点とする和歌説話集だが、増殖して業平の境涯とは無関係のものまで入っている。『大和物語』は和歌について語る歌語りの場の記録集、『平中物語』は個人の和歌説話を数珠繋ぎに編む。それぞれの成り立ち方がちがう。

「随筆」は、南宋の洪邁（こうまい）の『容斎随筆』が嚆矢で、筆任せの意味だが、第五筆で途絶えた。すでに北宋時代に科学技術を中心にした沈括（しんかつ）の『夢渓筆談』があったが、自在に部立がしてある。洪邁の「随筆」は部立せず、体系的思考抜きに綴るという含意だったと推測されよう。ジャンルとしては、のち、清代の『四庫提要』で「南宋説部の首」と折り紙のついた論説の書である。ところが、日本では戦国時代の一条兼良編の教訓説話集『東斎随筆』、俳諧師、荒木田守武に恋にまつわる笑話集もふくむ『守武随筆』がある。撰者のコメント抜きの撰書や抄物と同じ意味で用いられていた。江戸前期には山鹿素行のように大議論を「随筆」と銘打つ者もいたが、中期に奇譚巷説ブームが起こり、「茶話」などの軽い読み物

も流行り、後期の好事家による事物起源なども一括して明治期に考証随筆と呼びならわした。これらは一九二七年、『日本随筆集成』の名で吉川弘文館から刊行される。

西欧の思想家の思索（エッセイ）が「随想」などと訳され、青年が自己内面を率直に記録し、自省の材料にする「修養日記」や作家の折にふれての偶感などと交錯し、一九二〇年代の大衆文化のなかで総合雑誌の軽い歴史読物や海外漫遊記なども「随筆」と総称された。

近現代には古典評価の浮沈が激しい。高津鍬三郎は『源氏物語』を絶賛していたが、武張った時期には。その柔弱な文体が欠点とみなされた。日露戦争後に女性解放の機運が起こると、藤岡作太郎が平安貴族の女性の立場に踏み込んだ批評を見せた。

そののち、特筆すべきは池田亀鑑『宮廷女流日記文学』（至文堂、一九二七）だろう。〔はしがき〕は『土佐日記』や『枕草子』にも言及し、本文校訂など考証と鑑賞とを批評性の強い「梗概」（一種の作品論）にまとめる工夫を披歴している。その意味で国文学史上の記念碑といえるものだが[14]、池田はその前年、「自照文学の歴史的展開」（『国文教育』一九二六年一一月）で「女流日記文学」を「自己みずからの真実を、最も直接的に語ろうとする懺悔と告白と祈りの文学の一系列」とまとめていた[15]。当時、池田は少女小説も手掛けており、その立場から女房層の内面に寄り添う姿勢を示している。作中で主人公の姿を客観的に描かず、作家が自身の心懐を直接語る「心境小説」の流行に触発されたものだった[16]。

中国での「日記」の語源は日付をもつ記録と推察される。平安時代には蔵人など官人の日々の業務記録が「日記」だった。が、女房層は陰陽寮が作成する具注暦を写したりしないから『宮廷女流日記文学』に取りあげられた作品に日付はない[17]。その最初の『蜻蛉日記』の作者は女房でもない。夫と相聞歌を重ね、だが、独り身をかこつに等しかった半生の回想記で、最初の回想の時点で、このようなものは日記とは呼べないと記し、それでも「日記」と呼んだ。日次記の形なら「日記」と呼ぶようになっていったのだろう。

二番目の『和泉式部日記』（和泉式部物語）は「女」を主人公とする物語形式で、身分ちがいの恋愛が成就するまでの一年半の顛末を一人称視点で回想する。が、そのとき語り手が知らず、のちに人から聞いて知ったことも、作者はその場面に書き込んでいる。和泉式部は三人称的な主人公として物語のなかで活躍していることになる。それと対蹠的なのが『紫式部日記』で、和歌も情景描写も入るが、作品として構成する意図をもたない日次記の手控えである。「六国史」の途絶えた後を継ぐ「新史」の構想を持っていた藤原道長が一条天皇の皇后となった娘、彰子の出産をめぐる宮廷の様子を記録するよう命じたのだろう。めでたく皇子が誕生し、その部分が『栄華物語』に収載されたことはよく知られる。

『更科日記』の作者も女房ではなく、『蜻蛉日記』の作者と縁戚関係にあり、生涯の回想記で、終わり近く、若いときに物語に夢中にならなければ、もっと早くに仏の道に入れたのに、と懺悔がなされる。そのあと『讃岐典侍日記』『十六夜日記』『弁内侍日記』『中務内侍日記』と並ぶ。『十六夜日記』の前半は、阿仏尼が都人と使いを介して和歌を交わしながら鎌倉に赴く日次記の紀行文。他は宮仕えの女房の回想記である。

いずれも歌日記の展開である。『成尋（じょうじん）阿闍梨母集』『建春門院中納言日記』（たまきはる）『建礼門院右京太夫集』など家集の日記部分は回想になる。男性貴族のものも『平中物語』は数珠つなぎにした歌日記だし、『多武峰少将物語』（高光日記）は藤原高光が妻や妹と交わした歌書簡集で、作者たちのジャンル意識のちがいはつかめない。それゆえだろう、玉井幸助『日記文学概説』（目黒書店、一九四五）は範囲を紀行文に広げ、「日記文学」の形式を日次記、本質を「私記」と規定したが、範囲を広げてもそれぞれの「文学」性のちがいは残る。

次のことは池田亀鑑の責任ではないし、今では信じられないかもしれないが、やがて「日記文学」が「私小説」の淵源といわれ、第二次大戦後、「日本に独自の私小説」伝統を誇る論調と、逆にその後進性を「私小説的風土」と難じる論義が交錯していた[18]。

三、日本文芸における言語二重性

『日本文学史』〔上巻〕の高津鍬三郎〔総論〕は、「西暦紀元前から現在まで文学史が続くのはギリシャと中国のみといい、それに続いて長い日本文学史をイギリスやフランスと比較する姿勢を見せていた。ギリシャ古典は東ローマ帝国の下で口語作品にも古色を残して近代文芸へ展開する。東ローマ帝国が一五世紀にオスマン帝国に亡ぼされたのちは、亡命者の手で国外に運ばれ、イタリア・ルネッサンスのもとになった。四世紀頃、西ローマ帝国内に北と東から文字をもたないゲルマン民族が移住（＝侵入）し、ラテン語とその俗語のロマンス諸語（フランス語・イタリア語・スペイン語・ポルトガル語など）との二重状態が長く続いたが、叙事詩などは一一世紀頃に現れる。ヨーロッパの北と東に住んでいたゲルマン系民族はキリスト教化により八世紀頃からラテン文字を使いはじめるが、ドイツ語、オランダ語のほか北欧諸語の多神教の神話、エッダやサーガは一二世紀頃から現れるといわれる。

中国では古代から文言が公用語とされ、五代十国の乱で貴族層が没落した一〇世紀後半、宋代には巷間の芸能などで共通語（方言で暮らす人々は聞いてわかる程度）が成立し、元代の『三国志平話』以降、文言と白話が並行した。が、ともに中国語の文体様式である。

日本では遅くとも六世紀半ば、推古朝で冠位十二階、十七条憲法を定めて部族連合国家

を一歩脱し、隋と国交を結んで以来、漢文(古典中国語)を公用文とし、その下で民間歌謡など口語をベースにした倭文の文芸が展開した。系統のまったく異なる二言語が長く並行して展開したこと自体、国際的に異例で、前近代を通して語彙だけでなく、漢文の韻文と散文に跨る構文や修辞を受容し、とくに院政=鎌倉時代以降はそれが民間にも及び、多様な文体様式(written modes)が展開した。そこに日本文芸の比類のない特徴がある[19]。

中国の詩は民間歌謡から発展したが(ともに「歌」)、唐代には複雑な平仄と脚韻を備える五言絶句・七言律詩など美麗な形態をなした。それ以前、南北朝・六朝時代には事物を並べて謳いあげる「賦」が盛んになり、次第に抒情性を増した。たとえに典型的な例をあげ(典拠)、長い対句を並べ(駢儷体)、脚韻を踏んでリズムをつけ、韻文と散文の中間とされる。南朝・梁の昭明太子編『文選』に多く収載され、早くは聖徳太子一行が伊予の温泉に残した石碑に受容の跡が残されていた。また漢訳仏典やその疏(解釈)にも流麗な駢儷体を駆使するものが多く、聖徳太子の『三教義疏』が典型である。

『万葉集』では、柿本人麻呂が駢儷体をヤマト言葉に移して吉野の四季の風俗を折り込んだ国見歌(巻一-三八)が知られ、妻との別れを歌った「石見相聞歌」(巻二-一三八)には民間歌謡の繰り返しが駢儷体に移ってゆく技巧を見せてもいる。人麻呂は「泣血哀慟歌」の周辺のうたに、ヤマト言葉「やまぢ」に「山道」のほか「山路」「山径」の漢語を当て、経路や細道の含意を示している。謝霊雲の山水詩などを参照していよう。

その人麻呂から多くを学んだ山部赤人の「神岳(かむをか)に登りて山部宿祢赤人の作りし歌」(巻三―三二四)の後半は「春の日は……秋の夜は」「朝雲に……夕霧に」と対句を重ね、春の日・山、秋の夜・川、朝雲・鶴、夕雲・河津と季節を越えて対比する。付近に漂うのは神々しい仙境の気配であり、鶴や河津がそれに応じるのは、赤人歌に際立つ特徴である[20]。

和文の起原を祝詞とするのは通説だが、『日本書紀』には六七八(天武天皇七)年に「大祓(おほはらえ)」を行ったとある。『延喜式』(九二七〔延長五〕)〔八 祝詞式〕中の「大祓」は、神職が参集者に向かって「諸聞食(もろもろきこしめたまへ)と宣(の)る」とはじめ、参集者が「おう」と応え、神職が「高天原に神留(つま)ります」と語りはじめる(以下略)。「宣下体」といわれるこの形式は中臣氏のもので、のち神道諸派では、天に向かって奏上する形に改められたとされる。

その宣下体は、現存最古の『儀式』(八七〇年代半ば)〔巻五〕に載る種々の朝廷儀礼で、宣命大夫が群臣に向かって天皇の宣旨を告げる方式を踏襲したものと推察される。宣旨の骨格は「天皇が大命(おおみこと)を宣(の)る~と」ないし「~と宣る」を重ねる形をとる。この述語で目的語を挟む形は「云ふ」などにも見え、述語で閉じて安定するヤマト言葉の癖といえよう。

そして、この形は中国の皇帝の宣旨の定型「皇帝宣～」を、漢文で詔勅を起草する史官が漢文から構文と語彙を借りて倭文に翻訳したものだった。なお六八九年、持統が制定した飛鳥浄御原（きよみはら）令は、筆頭に中国の官制にはない神祇官と太政官を設け、その神祇官の長に中臣氏を任じ、翌年、持統の即位式では物部氏が大盾を立て、忌部氏が神璽鏡剣（みしるしの）を捧げ、中臣氏が天神寿詞をあげた。中臣も忌部も壬申の乱で天武方に与して抜擢された。

近年、藤原京跡から大量の木簡が出土し、多様な用途が明らかにされているが、漢文が書ける貴族・役人層と荷札の数字など符号を扱う下級層に二極分解している。平城京では、東大寺の写経生が出した宣命書きの欠席届が正倉院文書中に残されていた。便宜的に許容されていたにすぎない。写経生らは定期の休暇を得るための要望書を正格の漢文で提出しており、構えれば漢文を書けたのである。

上代では「変体（和化）漢文」（Japanized Chinese）も問題にされてきた。その筆頭に「法隆寺金堂薬師如来像光背銘」があげられてきた。ところが、これは純粋の漢文であることを頼衍宏（ライイエンフン）（台湾・静宜大学）の「法隆寺薬師如来像光背銘新論」（『日本研究』二〇一八年一一月）が先行研究に丁寧に応接し、一つ一つに中国の類例をあげて論証した。たとえば「将造寺薬師像作仕奉詔」では「造」と「作」の目的語の位置が違っていると指摘されてきたが、「将造寺薬師像」（将に寺・薬師像を造り）で区切れば、その下は「作仕奉詔」（仕奉（しぶ）の詔を作る）となることなど綿密に検討している。ビッグ・データ時代に、これまでの研究者の先入観による誤認が解消されたのである。さらに碑銘の脱稿時期を用明天皇の二一回忌にあたる六〇七年頃とし、執筆者を渡来系氏族、長忌寸意吉麻呂（ながのいみきおきまろ）と推定、彼が漢詩の修辞技巧に熟達し、それを和歌にも転用した人だったことを明らかにした[21]。

『古事記』の場合は、太安万侶が〔序〕で述べているように意図して部分的に「訓述」（字音仮名を用いて翻訳）している。が、断らずに返り読みするなど、正格の漢文と語序が異なるところもかなりある[22]。他方、今日、ほぼ半分の巻に和習が指摘されている『日本書紀』は、長く正格の漢文として公認されてきた。『記』『紀』を同列には扱えない。

七一三（和銅六）年の元明天皇の命に応じた五つの「風土記」について、最近の報告では『播磨国風土記』には和化漢文で均一化する意図が見え、『豊後国風土記』『肥前国風土記』には正格の漢文への志向が伺われること、『出雲国風土記』『常陸国風土記』には情景描写に『文選』等の文飾が見えることなど、より精確な分析がなされ、朝廷の許容度も判明した。「解」には珍しく長く保存され、後世まで参照されたこともいわれている[23]。

史書の散文では、唐代中期、文飾を嫌い、実直な古文に復帰する韓愈らの方向が聖武朝

頃から受容され、草稿も重ねられたが、政変相次いでまとめられず、平安初期に『続日本紀』に編まれたと推測されている。以降、それで四つの国史が編まれ、『類聚国史』もまとめられた。のち、江戸時代には実直な「唐宋八家文」が幕府・諸藩で尊重された。

平安時代の最初の百年ほど、宮廷は漢詩文に染まった。一〇世紀への転換期、宇多天皇の宮廷改革は後宮に和歌や物語を盛んにしたが、大江千里が『白氏文集』の翻案に挑んだ『句題和歌』や菅原道真が漢詩と和歌を媒介したことなどとともに、それには漢文書き下し様式の成立も深くかかわっている。摂関政治期に大学が解体され、漢文の読み下し方は儒学系では各博士家の御家流となり、仏教では宗派ごとに異なっていたが、源為憲（ためのり）が一八歳で出家した尊子内親王のために編んだ仏教説話集『三宝絵』（九八四〔永観二〕）は、仏教入門書としてよくできており、草仮名・平仮名・カタカナ混じり文の三種の伝本が遺されていた。表記の外見は異なるが、内実は変わりない[24]。訓点の打ち方が変わっても、語彙の解釈に相違がなければ、内容に揺れが生じないのが漢文書下し体の様式性である[25]。

最近，『枕草子』の「文は文集、文選、はかせの申文、新賦、史記……」にいう「新賦」は、唐代に科挙試験の課題になった「律賦」を指すと明らかにされた[26]。対句と韻、声調（平仄）を厳しく整えるもので、その志向は菅原道真から大江匡房（まさふさ）に受け継がれ、『和漢朗詠集』（一〇一三〔長和二〕頃）や『本朝文粋』（一一世紀中期）の編纂を支え、それらはのちの和漢混交文にまで響いているといわれる。院政＝鎌倉時代には他方、上句と下句をつけあう短連歌が鎖連歌に発展し、「賦物（ふしもの）」と呼ばれる機知の遊びが盛んだった。武将で学者の源光行が『蒙求和歌』『百詠和歌』（ともに一二〇四〔元久元〕）を編み、和漢に跨る修辞技法を武家の子弟にも育てたことを加えておこう。

平清盛の福山遷都から源平合戦、後醍醐天皇の倒幕と天下分け目の争乱が相次ぎ、巷間の説話は増殖を重ね、歌舞音曲も盛んで、多彩なジャンルと文体が入り乱れる時代が続く。火事や辻風の動態をも捉える前代未聞のリアルな描写も和漢の修辞も自在に駆使する『方丈記』（一二一二〔建暦二〕）は別格だが、漢文によく通じた公家が鎌倉の賑わいを訪ねるための紀行文『海道記』『東関紀行』（一三世紀前半）は、ともに典拠を踏まえた駢儷体を書き下し体で連ねる。ただし、『東関紀行』の後半、富士を見て『竹取物語』の異伝、「鶯姫」伝承にふれたところは和文体に傾く。『大鏡』など四鏡は、それぞれ対話で物語を進める外枠をもち、漢語を多用する歴史叙述と和文体の係り結びが組み合わされる。説話集の編集姿勢も多彩で、『今昔物語集』は仏教の年代記を編もうとする形を残して早くに放棄されたが、天台系説話集への収録作を法相の宗旨で書きなおすなど、文体は典拠に規定され

ていた[27]。『宇治拾遺』は巷間の話に関心を集めて口語体にも接近する。合戦記は『将門記』（一一世紀成立か）は変体漢文、『保元物語』『平治物語』（ともに一三世紀前半～十五世紀後半）は漢文書き下し体で、和漢の故事を喩えに用い、敗者の側の豪傑の活躍を駢儷体で飾る。『源平盛衰記』は、両軍の側の説話を重ねるが、漢文調の描写が武将の出で立ちの詳細に及ぶ。『平家物語』も琵琶の調べに乗せる語り本系、とりわけ覚一本は和歌の掛詞を駆使する道行文が情調を醸し、平家一門の没落を悲哀に染める。同じく南北朝の争乱を鎮めた足利義満政権下に編まれた『太平記』は、両軍の側の史料を併せ、和歌は落首や狂歌に限り。駢儷体の書き下し体と原典の漢文をふんだんに引いて合戦の様子と武士の大義名分、忠孝を謳いあげる。『徒然草』も漢文書き下しと和文を章段で使い分ける。和漢混交文は、これらの総称にすぎない。

院政＝鎌倉時代から。このような文体の多様化と見合うかのように、漢文の規範が崩れていった。九条兼実の『玉葉』、源頼長の『代記』など公卿の漢文日記にしはしば書き下し体が混入し、鎌倉幕府の日録『吾妻鏡』に恣意的な語彙が多用された。北条執権が武家法を定めた『御成敗式目』（一二三二）は、武士向けに助詞など混ぜた「変体漢文」だった。とくに室町幕府が形だけとなった「戦国」すなわち国家分裂時代には、文末に「不可」を用いるような「漢化和文」が溢れ、戦国大名の楽市楽座令に用いられて、江戸幕府と諸藩が独特の慣用語をもつ「候文」で政令を発するもとになった。上代と中世の「変体漢文」は同列には扱えないだろう。

（二〇二六年八月六日訂正）

*本稿は二〇二五年六月二八日、全国大学国語国文学会夏季大会（二松学舎九段校舎）国際シンポジウムにおいて、ＰＰＴを用いて報告した内容を再編集したものである。蓋然性の高い問題の整理の試み（problematic）だが、簡潔を旨とした、別途、展開を期したい。

---

1 ただし、江戸中期、和訳太郎（上田秋成）の浮世草子『諸道聞耳世間猿』中「器量は見るに貧乏の雨舎（やど）り」に「武芸」に対する「遊芸」として漢画と並べて作詩が登場する。武士に変装した町人が旅の途中、偶然、宿をともにした武芸に秀でた尼に手あわせを挑まれ、慌てて口走ったセリフの一端。町人に漢詩趣味が広がりはじめた時勢を映した滑稽譚だが、その趨勢は明治前期まで拡大の一途を辿った。

2 また一九一六年には「釈経部」に替えて「宗教」部を立て、「耶蘇教」（キリシタン関係）の項を加えている仏教で宗門の教えを意味した「宗教」の語は明治一〇年代に、神道・儒教など諸教を横並びにする新概念となり、とくに洋学者のあいだに広がった。が、政府＝文部省は教育勅語ののち、神道は皇室の祖先崇拝であり、宗教ではないとし、信教からの教育の自由の声を抑え込んでいった。

『明治文学全集11　福地桜痴集』（筑摩書房、一九六六）に所収。

森岡健治『近代語の成立　明治期語彙編』（明治書院・一九六九）など参照。一九七〇～八〇年代に訳語の研究方法が一新された。

農科は化学肥料を開発にかかったドイツの総合大学が抱えはじめていたが、工科は欧米ともに専門大学のみで、総合大学が学部を抱えるのはコンピュータ・サイエンスの勃興とともに一九七〇年代にことである。

北村透谷も一八九三年、山路愛山「頼譲論」に食ってかかった論議で「純文学」を用いている。高津の用語を承けたものだろう。ただ、一八七一年からテーヌ『イギリス文学史』を英訳していたオランダ生まれのアンリ・ファン・ラウンは自著『フランス文学史』（*History of French Literature*, vol.1 1876）第三巻（1876, p.180）に、マクシミリアン・ロベスピエールが〝pur literatur〟から離れたことを友人たちは惜しんだとある。これは詩のこと。高津は『日本文学史』〔総論〕（三頁）で、そのファン・ラウンの著の巻頭から「文学史」を重視する主張を紹介しており、彼は、この用法を借りた可能性もあるだろう。韓国・成均館大学・博士課程・禹帝印（ウジェイン）さんの教示による。

なお「芸術」は、漢文では士大夫の「藝」（宋代には囲碁も盆栽も）と民間の医術、呪術など「方術」を併せた語だったが、ギリシャ語〝tékhnē〟・ラテン語〝ars〟の訳語として技芸一般を指す語となった。ただし西欧では一八世紀半ばに〝art〟から美的価値をもつ〝fine art〟が分岐し、これが明治期の「藝術」の中義をなし、訳語に「美術」も用いられた。が、「美術」は工芸など応用美術を分岐し、そののち一九一〇年、文部省が絵画・彫刻をいうフランス・アカデミアの用語を借りて「美術展」を開催したとき、狭義が定着した（そののち、いわゆる芸術写真がここに加わる）。日本では、それと詩・戯曲・小説を横並びにする「文芸」という概念を上田敏らが強く押し出し、文化主義の風潮を受けて「創作」という概念で括って近代短歌・俳句をあわせて大正期「文壇」が形成されたと政府＝文部省補及び総合雑誌の文芸欄などから判断される。

ただし「英文科」でイギリスの人文学を教えることはありえたはずだ。なお、ここでいう「純文学」は、一九二〇年代に「文壇文学」に対して時代小説と探偵小説が手を組んで勤労大衆向けの「大衆文学」を名乗って勃興し、第二の文壇を形成したことに対して、一九三〇年代に知的・芸術的に高尚なジャンルがいわゆるつきで「純文学」と称されたものとは意味がちがう。第二次世界大戦後には、シリアスなテーマを肩の凝らない文章で書く「中間小説」を挟んで、「純文学」が定着していたが、一九八〇～九〇年頃、戦後文壇体制が崩壊し、中間小説および大正文学雑誌は消滅した。

佐々木孝浩『芳賀矢一―「国文学」の誕生』（岩波書店、二〇二一）などを参照。

たとえば風巻景次郎は「芳賀矢一と藤岡作太郎―黎明期の民族の発見」（一九五五）で、国学の家に生まれた芳賀矢一の真骨頂を『国文学史十講』に見いだしている。そして風巻は、その主情主義を『中世の文学伝統』（一九四〇）で和歌中心の文学史観に受け継ぎ、『日本浪曼派』を沸き立たせた。その戦後改版（角川書店、一九四七／岩波文庫、一九八五）も骨子は変わらない。他方、風巻らは、芳賀矢一の脱国粋主義を顧みることなく、宣長らの国学を文献実証主義と言い換えた。たとえば、秋山虔『『源氏』味読のための理想的注釈書」（有川武彦校訂『源氏物語湖月抄　増注』講談社学術文庫、一九八二）は、北山季吟の『湖月抄』を転換点として、それまでの鑑賞主義的注釈が「自由討究的な立場に基づく文献実証主義」に転じたとしている。江戸中期の学問環境については、西郷信綱『国学の批判―方法に関する覚えがき』（未来社、一九六五）が、詳しき分析しているが、少し

遡っておく。江戸中期には実物を観察し、考証する議論が満ちてはいたが、それは陰陽五行説を退け、薬効の経験に立つ古医方を実物や実地の観察に広げた貝原益軒に発する流れだった。西欧一九世紀の社会問題と取り組んだ実証主義(positivism)とも史料批判に立つ文献実証主義とも、目的と方法が異なる。鈴木貞美「近現代と往還しつつ、東アジア古代の文化交流史を問い直す」、蔵中しのぶ編『古代の文化圏とネットワーク(古代文学と隣接諸学)』(竹林舎、二〇一七)を参照。

11 鈴木貞美『言文一致神話の解体　三遊亭円朝考』(文化科学高等研究院出版局、知の新書、二〇二三)を参照。

12 『枕草子』『方丈記』『徒然草』をまとめて「随筆」と呼んだのは高津鍬三郎『日本文学史』上巻が最初だが、「草子」は冊子の意味と言明している。そののち、有朋堂文庫の校訂者・塚本哲三が『枕草紙・方丈記・徒然草』(一九一一)の「緒言」末尾に「我が古典中の三大随筆」と述べた。学界では認める気配はなかったが、有朋堂文庫は何度も刊行され、戦後版(塚本哲三編輯、日本代表古典集、一九四六)もある。それらを見て育った世代が第二次大戦後、文学史の副読本などで「三大随筆」と喧伝したと想われる。

13 鈴木貞美「『今昔物語集』とは何か?」(季刊『iichiko』2024, no164・165・166)を参照

14 石田譲二「解説」(『宮廷女流日記文学』至文堂、一九六五)を参照。

15 鈴木登美「ジャンル・ジェンダー・文学史記述―『女流日記文学』の構築を中心に」(ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典―カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社、一九九八)を参照。

16 久松潜一は、のちに「日記文学の本質」(『国文学―解釈と教材の研究』一九六五年一一月)で、一九二〇年代から「日記文学」を講義していたと回想しているが、そこでは「心境小説」を用いている。なお、「私小説」はヨーロッパ起源のイッヒ・ロマンはゲーテ『若きウェルテルの悩み』(*Die Leiden des jungen Werthers*, 1774)に発し、フランスで盛んになった実体験を再構成したもの。日本では尾崎紅葉「青葡萄」(一八九五-六)が嚆矢とされることを永井荷風「矢はず草」(一九一八)が明記しており、主人公を造形しないのは随筆としていた。それゆえ、語り手=作家が自身の姿を作中に造形しない随筆的な志賀直哉「城の崎にて」(一九一七)などは「私小説」とはいえないと宇野浩二が唱えていたが、のち葛西善蔵晩年の随想的短編に感動し、「『私小説』私観」(一九二五)で特異な「私小説」と認めた。ただし、佐藤春夫『田園の憂鬱』(定本版、一九一九)など語り手の境遇が一定程度浮かびあがるものも心境小説と呼ばれており、議論は錯綜した。

17 いわゆる「日記文学」では、南北朝時代に御家再興までのいきさつをつづった日野名子の『竹むき書き』のみ、詳しい日付が入る。仮名日記の広がりによるものか。

18 鈴木貞美『「日記」と「随筆」―ジャンル概念の日本史』(臨川書店、二〇一六)及び『日記で読む日本文化史』(平凡社新書、二〇一六)を参照。

19 民間歌謡などが字音仮名で記せたのは、いわれてきたように、三国時代の朝鮮半島の官吏が漢語の自立語のあいだに朝鮮語の助詞や助動詞など助辞を字音仮名で付し、また訓仮名も用いる「吏読」と呼ばれる書法を開発しており、それを借りたからである。日本語も朝鮮語と同様、格で運用するため、語順は規範を持たず、主格の提示も必要がない。それゆえ漢文の構文にそって助辞を付して読み下し、また書き下すことに、さしたる障害は生じない。日本の朝廷の吏官は、かなり早くから百済系が務めていたことが『日本書紀』にも遺されている。リズムについては中国語が文字、日本語が拍(モー

ラ）で刻むため、七・五調、五・七調について関連の有無は未解決のままである。

20 鈴木貞美「クロス・メディアのナラティヴをめぐって、前近代日本における書き言葉の多様性に及ぶ（二）」「水門―言葉と歴史』三三号（二〇二六）連載第二回を参照。

21 群馬県高崎市山名町に残る「山上碑」は天武天皇一〇（六八一）年、放光寺僧が記し残したもので、現存最古とされる。全部で四行の碑文が刻まれているが、上から漢字を辿りさえすれば意味は分かるので日本流とされているが、漢文の文法を外れているわけではないだろう。

22 国学院大学教授・三矢重松が晩年にまとめた学位論文『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』（一九二五）〔第一章 序説〕「一、古事記の文体」などで指摘している

23 奥田俊博『風土記文字表現研究』（汲古書院、二〇二四）を参照。

24 〔序文〕冒頭に引かれた盛唐の詩人、厳維の韻を踏んだ七言の対句「観身岸額離根草 論命江頭不繁舟」の前半は、奉献本の書き下し文が柔らかければ「身を観ずれば岸の額から根の離れたる草」、硬ければ「身ヲ観バ岸額ニ根離ル草」あたりだろうか。出雲路修〔解説〕（『三宝絵―平安時代の仏教説話集』平凡社、東洋文庫、一九九〇）、馬淵和夫「三宝絵 解説」（『新日本文学大系』31岩波書店、一九九七）など参照。なお、築島裕『平安時代の漢文訓読体につきての研究』（東京大学出版会、一九六三）は構文・修辞・語彙・音韻にわたって漢文に規定された和文の様式を中間言語的体系として仮説的に想定していると想えるが、平安時代の和文の性格は係り結びを要求したように文意を述語に反映させる傾向があるという程度にとどまり、やがてそれも消えてしまった。膠着語の性格で自由度が高く、体系性が弱いといえよう。江戸時代に一時期、道春（羅山）点、後藤点が並び立ったことからも、それは了解できるだろう。訓点の打ち方を統一したのは二〇世紀に入ってからの漢文教育である。

25 訓点の打ち方を定めたのは二〇世紀に入ってからの教科書においてで、今日まで踏襲されている。

26 陸穎瑤「平安朝における中晩唐詩賦の舶来と享受」（京都大学博士論文二〇二三）、張培華『枕草子漢文受容論』（和泉書院、二〇二四）を参照。